

初任者の傾向

2023. 8. 10

初任者の授業を参観していると、同じような傾向があることに気づく。まるでルーティンのように前の時間を振り返る。国語の場合、1週間に3～4時間ある。前の時間のことを、そんなに忘れるだろうか。忘れるような授業をしていることの方が問題である。多くの場合、授業者の話か、一問一答による振り返りである。それも丁寧すぎる。

生徒は、早く取り組みたいのである。丁寧すぎる導入は、かえって生徒の意欲を下げる。もし、前の時間を振り返る必要があるならば、前時で一番重要だった発問をもう一度してはどうだろう。あるいは、生徒のノートやワークシートに書かれた記述内容を読み上げ、紹介してはどうだろう。たちまち、生徒の国語のスイッチが押されるのではなかろうか。

学習課題が出てくる。提示はされるが、授業者が用意したものである。今日はこれをやりますという提示の仕方である。できれば、生徒とのやりとりがあって、自然な形で学習課題へともっていききたい。課題は授業者が用意したものであっても、「なるほど。よし、やってみよう」と、生徒に思わせたい。これがむずかしい。

学習課題の文言もむずかしい。「～しよう」のLet's型になりがちである。中身も、何をやるのかがわかりづらいものが多い。実は、授業者自身が、何をしたいのかがわからななのである。だから、抽象度の高いぼやっとしたものになってしまう。それでも、授業は進んでいく。生徒は健気に取り組む。これが、恐ろしい。

国語の授業では、他教科に比べて、音読の時間が多くなる。問題は、音読のさせ方である。意外と、バリエーションが少ない、引き出しがない。なぜなら、初任者の授業のベースになっているのは、自分が受けてきた国語の授業だからである。まず、一人一人の音読量を確保しなければならない。そう考えると、一人一文リレー読みが行われるはずがない。斉読、交互読み、速読、ペア読み、グループ対抗、クラス半分対抗、群読、暗唱など、その目的によって、どの手法をとるかが決まる。数時間の授業を通して、一つの教材を10回は読みたい。様々なバリエーションを使って、生徒からしたら、いつの間にか、10回読んでいたというのがよい。

また、授業者の範読は、CDなど使わずに、自分で行った方がよい。途中で止めたり、ちょっとした解説を入れたりできる。物語や小説などの文学教材では、感情など入れずに平板に読む場合がある。朗読してしまうと、生徒の読解に影響を及ぼすことがあるからである。生徒にとって、授業者の読みは絶対である。あるいは、本気で朗読するかである。やっぱり国語の先生はすごいと思わせることである。

どれも初任者には、ありがちなことである。では、経験を積んでいって、5年後、10年後、そして50代になると、授業は変わるのだろうか。変わるのは、どのくらいの割合だろうか。何か特別なことがあれば変わるだろう。あるいは、地道に目標をもって授業に向き合ってきた先生は、少しずつ変わっていくだろう。しかし、多くの先生方の授業は、基本的には変わらない。初任者の傾向は、各年代の傾向でもある。